



# 大田区立龍子記念館版 記念館ノート

## 第9号

発行：2025年3月31日  
編集：大田区立龍子記念館

2024年12月7日から翌3月2日に開催したコラボレーション企画展では、川端龍子の作品と現代を生きる23人のアーティストの作品がならんだ。

## 館のトピック

### ◆川端龍子＋高橋龍太郎コレクション

コラボレーション企画展を開催しました

大田区立龍子記念館では、日本屈指のアートコレクターとして知られる精神科医・高橋龍太郎氏のコレクションを、日本画家・川端龍子（一八八五～一九六〇）の作品とともに展示するコラボレーション企画展「ファンタジーの力」を二〇二四年十二月七日～二〇二五年三月二日に開催しました。このコラボレーションは、二〇二一年に好評だった企画展「川端龍子vs.高橋龍太郎コレクション 会田誠・鴻池朋子・天明屋尚・山口晃」から続くもので、今回は視点を変え「ファンタジー」をテーマに、鑑賞者の想像力を刺激する展示空間を生み出すことを試みました。高橋龍太郎コレクションからは二十三名のアーティストが出品し、展示室においては、草間彌生や李禹煥、奈良美智、丸山直文らの作品が龍子の作品とともにならび、さらに、記念館に隣接する龍子のアトリエでは、加藤泉、西村陽平、宮永愛子の作品を展示し、龍子が制作に打ち込んでいた空間を感じながら、現代アート作品を鑑賞できる特別展示を行いました。

また、本展では新たな試みとして、ブックディレクター・幅允孝氏が選書した本を展示室とアトリエに設置しました。六章から構成された本展の各章のテーマに沿って、絵本から専門書までおよそ一〇〇冊の本が選書され、来館者がさらなるファンタジーの扉を開くことができる展覧会となりました。そして、来館者が展示室で本を手にとって、アトリエへのまなざしを深めるだけでなく、アトリエでゆっくり読書を楽しむことができる時間ももうけました。この取り組みは、国の有形文化財となったアトリエの公開と活用を進めるとともに、当館においてアートと本といった複合型の展示の可能性を開く企画となりました。

## 2025年度 展示予定

- 名作展「川端龍子の描き出した世界 生誕140年を迎えて」  
会期：3月29日（土）～6月22日（日）  
展示解説：4月20日（日）、5月5日（月・祝）、25日（日）、6月22日（日）
  - 名作展「時局と画家 川端龍子の1930～40年代」  
会期：7月12日（土）～9月21日（日）  
展示解説：7月27日（日）、8月24日（日）、9月21日（日）
  - 川端龍子生誕140年特別展「川合玉堂と川端龍子（仮称）」  
会期（予定）：10月11日（土）～11月9日（日）（予定）
  - 名作展「タイトル未定」  
会期：2025年12月6日（土）～3月8日（日）
- ※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

## 館の基本情報

### 《所在地》

大田区立龍子記念館  
〒143-0024 東京都大田区中央4-2-1  
TEL 03-3772-0680  
URL <https://www.ota-bunka.or.jp/ryushi/>

### 《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- 入館料 一般200円、中学生以下100円  
※65歳以上（要証明）、未就学児及び障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料  
※特別展、企画展の入館料はその都度定める
- 休館日 毎週月曜日（祝日の場合は翌日）  
年末年始（12月29日～1月3日）  
展示替え等の臨時休館

# 川合玉堂と川端龍子の風雅な交流

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

## ■ラジオ放送の対談が玉堂と龍子を結ぶ

豊かな自然と人々の暮らしといった日本の原風景を描いて、名匠と称えられた日本画家・川合玉堂（一八七三—一九五七）と、大胆に日本画表現の可能性を探った川端龍子の間には、画風の上からは大きな隔りがある。しかし、二人の間には畏敬の念と深い交流があり、玉堂がこの世を去った時には、遺族から依頼され、龍子が葬儀委員長を務めるほどの強い絆があった。日本美術院において玉堂は、一八九八（明治三十二）年の創立時に師である橋本雅邦（一八三五—一九〇八）に従い参加したものの、その後は活躍の場を官展へと移しており、一九一五（大正四）年に再興日本美術院に入選し、昭和に入ると在野の美術団体・青龍社を設立した龍子とは、それほど接点はなかったものと思われる。そのような二人が親睦を深める機会となったのは、一九四七（昭和二十二年）元旦のNHKラジオ放送「新春閑談」における対談であったという。

最初、この対談に二人は乗り気ではなかった（註1）。特に、口下手な龍子は気が進まない様子であったことから、両者をよく知る美術評論家・横川毅一郎を進行役に交えることで、この対談は実現された。収録は奥多摩の玉堂の画室で行われることとなった。当日、玉堂はオールドパーのウイスキー瓶を片手にやって来て、「寒さしのぎに……」と龍子に一杯差し、龍子はこれを「舌の滑りもよくなりまししょうから……」と受けとった。初め緊張もあつたが、三人そろって新年のあいさつをする段取りであったが、龍子だけ先に「おめでとう」と言ってしまう微笑ましいハプニングがあり、それから玉堂が話しの糸口として俳句の失敗談を語り出すと、ホトトギス同人であった龍子は、進行役が必要ないくらいに饒舌になったという。その後は、ウイスキーが効いてきたか互いに冗談を言い合って終始楽しい雰囲気であった五分の収録は過ぎていった。



青龍展の会場に訪れた玉堂（写真・中央左、右に龍子）1952年

## ■奥多摩で親睦を深めた二人

その二年後の一九四九（昭和二十四）年、龍子は玉堂のもとを再び訪ねている（註2）。目的としては、同年秋の第二十一回青龍展に出品予定であった草描「多摩を遊りて」のスケッチを描くためであった。龍子が奥多摩へ向う予定は、後に大観・玉堂・龍子による「雪月花」展を企画する兼素洞の桜井猶司から玉堂へすぐさま伝えられることとなった。玉堂もこの機会を逃すまいと、桜井に御岳の料亭旅館・河鹿園で歓迎の宴を催すよう依頼した。そして当日、奥多摩でのスケッチを終えた龍子を、玉堂は次の一句で迎え入れた（註3）。

ビール抜く御嶽のぼつて来た君に 玉堂

龍子はそれに対して、次のように返したという。

風涼し喉の福毛の五六本 龍子

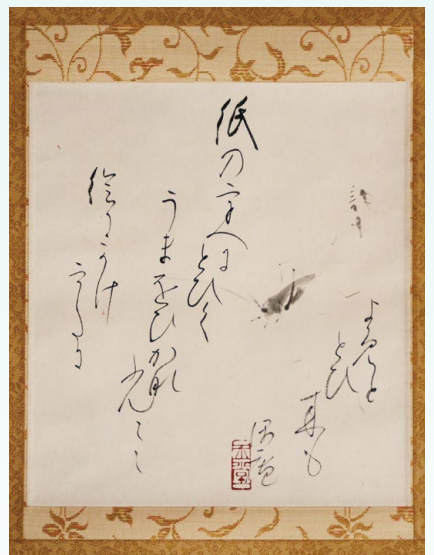
夏の奥多摩で清流に耳を傾けながらの雅趣に富んだ宴は、二人にとって楽しい時間であったに違いない。この一夜の返礼に、玉堂から送られた寄書には次の一句がしたためられた。どうやら玉堂も、風にそよぐ「喉の福毛」が気に入ったようである。

四五本の喉毛つまぐりむしを聞く 玉堂

そんな二人の楽しい交流を垣間見ることができる寄書が、河鹿園にはこのまわっている。河鹿園は大正末期に開業した料亭旅館で、二〇二〇（令和二）年に国の登録有形文化財として登録されている。玉堂は太平洋戦争中、奥多摩町白丸に疎開し、その後、御岳へ居を移してからも同園をひきにしてきたことから、同園へは屋号の揮毫だけでなく、自身の作品や蒐集していた美術品も多く寄贈されている。現在は旅館建物・室礼美術館として運営されており、奥多摩深谷谷をさんで対岸を臨めば玉堂美術館があり、まさに玉堂の晩年の暮らしを追体験できる場所となっている。同園が所蔵する作品（本稿掲載）は、龍子が描いて画賛は玉堂が筆を執った寄書きである。そこには、「紙の上に飛び来 うまをひかな ぶんぶん 絵にかけ歌に よめととび来も 偶庵（玉堂）」とあり、ウマオイが絵に描いて歌に詠めと飛んで来たこと書かれている。二人の交流はなんともユーモアに溢れ、風流なものであったということが窺い知れる一作ではないだろうか。

それから二人は親睦を深め、大観、玉堂、龍子の三巨匠による「雪月花」展が一九五二（昭和二十七年）から開催されることとなった。「雪」「月」「花」の画題を毎年、一人一題を担当し一九五四（昭和二十九年）に「雪月花」が完結すると、一九五五（昭和三十）年から今度は「松竹梅」

最後に、龍子が即興の一句を詠んでこの収録は締めくくられた。  
新年の多摩を眼下に絵師の家 龍子



龍子がウマオイを描き、玉堂が画賛を書いた寄書き（河鹿園所蔵）

を画題として引き続き展覧会が開催された。そして、その「松竹梅」が完結する一九五七（昭和三十三年）玉堂はこの世を去ることとなった。龍子が玉堂の訃報を知ったのは、富士登山中のことであった。山小屋の電話で家族に無事を知らせようとしたところ、留守居から伝えられたのが玉堂の逝去であった。下山して自宅へと戻ると、龍子は玉堂の遺族から葬儀委員長を依頼されることとなった。かつてラジオ放送の対談で進行役を務めた横川毅一郎が、すぐに龍子のところへ呼び出され、引き受けるべきか否かの相談がなされた。横川は龍子の背中を押して、葬儀は龍子を葬儀委員長として築地本願寺で執行されることとなった。横川は龍子の相談を受けた日を振り返り、床の間に次の一句が掛けられていたのを目にしたと言っている。親交を重ねてきた玉堂の死を、どれだけの深い悲しみと感慨をもつて龍子は受けとめたことであろう。

奥多摩の庵移されて銀河畔 龍子

玉堂と龍子の交流には、このような人情味あふれるエピソードがある。龍子記念館では今年、川端龍子が生誕一四〇年を迎えることを記念して特別展「川合玉堂と川端龍子（仮称）」を開催予定である。二人の交流をおして近代日本美術をより深く堪能することができる企画となるよう引き続き調査を進めていく。

### 註

- 1 横川毅一郎「芸苑一夕話 放送『新春閑談』前後 玉堂・大観ゆかりの記（上）」『日本美術』一九七二年一月、七十三頁。以降の放送収録のエピソードも同記事による。
- 2 横川毅一郎「芸苑一夕話 玉堂・大観ゆかりの記（下） 奥多摩河鹿園の雅趣」『日本美術』昭和四十六年一月、七十四頁。同誌には「喉の福毛」ではなく「胸」とあるが、本稿では註3の田澤の記事に「喉」とした。
- 3 田澤田村「玉堂翁と龍子画伯の句遊」『日刊美術』一九四九年九月三日